第３学年「図画工作」学習指導案

授業者　小沼　律子

２月１７日（金）２階アトリエ　９：００～９：４０

１　題材名　「ニンジン」のてつがく

２　題材（単元・活動について）

本学級では，「てつがく」の授業において，図画工作科と関連を図りながら授業を進めてきた。朝のてつがくの時間には，テラコッタ粘土を触りながら手で思考し，思考の形を表したり，「住まいになってみる」の授業では，人の「生」について考えてきた。これまで，特に低・中学年の図画工作の時間には，できるだけ大学構内に出て，外の世界に触れ，より多くの出会いと発見がなされるようにしている。「響きあい，高め合う～音楽・アート・生活文化・からだ～」（2013 年２月 21 日 p41-49）には，当時３年生の子ども達が，光と影について，様々な対象と関わり，発見と探究を繰り返しながら，学びを深め広げる様子を載せた。同年の教育実際指導研究会の当日資料では，冬，大学グラウンドに凍った足跡が無数に広がっていることをおもしろがる子どもや，校庭の隅にあるちりとりを見つけ，話しかけるようにして絵に表す様子などを紹介した。その時の対象を「生きているもの」のようにとらえ，関わっていく姿は，本時の授業を構成する重要な考えの一つである。

てつがくの授業が進むうちに，子どもたちは「てつがくってするものじゃなくて，あるんだよ。」と言い始め，「てつがくを探しにいく。」と言い，校舎内を歩いた。旅する子ども達は，栄養教諭が「雄飛の広場」においた葉付きのニンジンをみつけ，「ニンジンにもてつがくがあるかも。」と言い始めた。当然，「ただのモノだから，てつがくなんてない。」という子もいたが，「モノにもてつがくがあるのではないか」という問いは，上述した「生きているもの」のようにとらえることとつながっているのではないだろうか。その「生きているようにみえる」モノと，どのように関わっていくのかというところにおもしろさを感じ，その後，子どもの提案を聴き，切ったり潰したり，スープにして食べてみたりしながら，「ニンジンのてつがく」を探し続けている。

１２月に，教師が新たな展開を求めて，一応のまとめに入ろうとしたのだが，子ども達からは，「まだニンジンのてつがくについて中途半端。」という意見が出たので継続してニンジンを探ることとした。スープにして自分の舌で考えたことにより，「味わう」ということへも子ども達の思考は広がり，「味わう」ことを考えながら「ニンジン」を探っている。１月現在，冬休みに「ニンジン」についての情報を個々で集め，その情報を持ち寄り，１月１３日（金）の「てつがく」の時間では，ニンジンの栄養から，世界のニンジンの話や漢方薬，身体の話まで広がり，ニンジンを生きているものとして捉えながら語る子どもも出てきた。

このように，様々なアプローチでニンジンのてつがくを探っている。本時は，図画工作×「てつがく」の時間として，モノを生きているようにとらえる見方で，それぞれの「ニンジンのてつがく」をさらに考えていきたい。また，これまで同様，「みんな」で考えることが，強制的な「みんな」にならないよう，一つの解を導くのではなく，それぞれのニンジンのてつがくを探ることができるように留意したい。

３　学習活動計画（１時間目／全２時間）＊図画工作科のみでカウント

・情報の共有（１時間目）
　…多角的にみることができるように，それぞれが持っている情報を出し合う。
・「ニンジン」のてつがくについて考える（１時間目）
　…ニンジンのてつがくとはなんなのかを，これまでの対話をふり返りながら考える。

４　本時の学習について

（１）本時のねらい

「ニンジン」のてつがくについて，多角的に思考しようとする。

（２）予想される本時の展開

主な学習活動と子どもの姿	留　意　点
・「ニンジンのてつがく」について，今までの対話をふりかえりながら考える。	・これまでの対話や，共有してきた情報を振り返りながら進める。 ・無理に一つにまとめていくことはせずに，ニンジンにせまる過程を楽しむ。